

山口県の地質物語 - 9 : 領家変成岩とその広がり

山口県の南東端にあたる岩国市・周南市南部から下松市・柳井市を経て周防大島町にかけて分布する変成岩類を**領家変成岩**という。花崗岩類（領家古期・新期花崗岩）（図1）を密接に伴うのが特徴である。分布域の北東部では、岩国断層によって玖珂層群（美濃一丹波帯）と接し、西部では、末武川構造線によって周防変成岩（周防帯）と境されている。

領家変成岩の原岩は、北方の玖珂層群の延長とみなされ、泥岩、珪質泥岩およびチャート为主とし、砂岩、石灰岩および緑色岩をわずかに伴う。これらは肉眼的には、原岩の層理とほぼ平行に発達する面構造と、構成鉱物の粒度の違いに基づいて、片状組織（片理）と白黒の縞状組織（片麻状組織）に区分され、北から南へ黒雲母片岩帯（図2）と縞状片麻岩帯（図3）とに分けられている（西村ほか，2012，山口県の地質図 第3版）。

泥質変成岩の鉱物組合せは、緑色片岩相から角閃岩相を経て下部グラニュライト相に達し、領家変成作用による一連の**変成相系列**，すなわち**低圧型**をなすと考えられる（奥平，2009）。本岩の形成年代は変成鉱物の放射年代測定から、約1億年前（98～90 Ma ≡後期白亜紀前期）とみなされている（茂野・山口，1976，Suzuki et al., 1996）。山口県の地質概要図では“中生代低圧型変成岩”と呼んでいる（本シリーズ - 6 参照）。

本岩の広がり（本シリーズ - 8，図2参照），長野県高伊那付近から中央構造線の北側にそって西南西方向に走り、山口県南東部を経て、熊本県八代付近まで広がっている。

このような領家変成岩の帯状分布を**領家変成帯（領家帯）**（Kobayashi, 1941）という。領家変成帯は上位の美濃一丹波帯と北傾斜の低角度断層で接し、南部の中央構造線を介して三波川変成帯（三波川帯）と接している。領家変成帯と三波川変成帯は**対をなす変成帯**ともいわれている（都城，1965）。北東部（阿武隈地域）の変成岩およびその広がりを阿武隈変成岩（帯）あるいは御齊所変成岩（帯）ともいう。（文責：西村祐二郎）

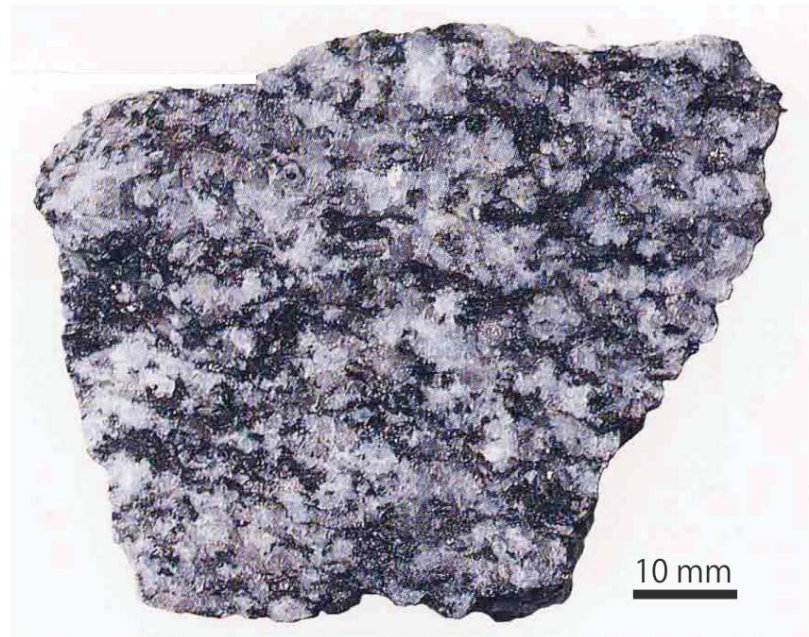


図1 片麻状花崗閃緑岩（領家古期花崗岩）
図1～3：同スケール，山口県の岩石図鑑



図2 黒雲母片岩帯の泥質片岩



図3 縞状片麻岩帯の泥質片麻岩